

報告

日本語運用能力の向上をめざして —日本語力テストの実施—

岸江信介 仙波光明 堤和博 清水勇吉
(徳島大学総合科学部)

(キーワード：日本語力、診断テスト、分析)

Aiming at Improvement of Student's Japanese Ability in the University of Tokushima -Implementation of a Japanese test-

SINSUKE KISHIE, MITSUAKI SENBA, KAZUHIRO TSUTSUMI, YUKICHI SHIMIZU
(Faculty of Integrated Arts and Sciences, The University of Tokushima)

(Key words: Japanese Ability, Japanese test, Analysis)

1. はじめに

昨今、日本各地の大学から大学生の日本語運用能力、日本語の基礎学力の低下が指摘され、日本語の運用能力をどう保証するかが話題になり始めた。

小野博ほか(2005)では、全国の大学生を対象にした基礎学力に関する調査報告の中で大学生の日本語力に関する実態を報告している。これによると、過去4-6年間における経年変化として、大学生の日本語力が中学生レベルにまで落ち込む率が著しく上昇したことを指摘し、この率が「国立大学では前回の調査時の平均値が0.3%であったが6%に、私立大学では6.8%が20%に、短期大学でも18.7%が35%に大幅に増加した」としている。日本の各大学において日本語力の低下を食い止めるための対策を講じることが急務である。

本学の「中期目標 1.1 言語運用能力に関する問題」のなかに取り上げられた「言語運用能力」は主として、外国語によるコミュニケーション能力をさすと考えられるが、日本語の運用能力も当然この中に含まれているはずである。しかしながら日本語力向上のための具体的な教育は本学において現状では実施されていない。

また、「ラーニングライフ 第1回学生の学習に関する実態調査」報告書(徳島大学2008)の「2-4」によると、日本語による「討論能力」や「コミュニケーション能力」に不安を持つ学生が多いことが指摘されており、日本語による表現や理解につ

いて学びたいと思う学生が多いことが予想される。

このような状況のもと、本学においても日本語力の診断を含め、日本語運用能力を伸ばすための具体的な方策を構築する必要性を痛感する。

2. 日本語力テストの実施

毎年、新入生オリエンテーション期間を利用して数学・理科などの基礎学力の診断のためのテストが実施されてきているが、日本語に対する診断テストはこれまで行われてこなかった。

2008年度、数学・理科の科目とともに日本語力の診断テストを実施した。各学科別の解答者数は表1のとおりである。

表1 学科別解答者数

解答者総数：	1,311名	
人社：178名	生工：58名	歯学：56名
自然：93名	知情：82名	栄養：51名
機械：114名	電電：106名	保健：127名
建設：85名	光応：50名	薬学：80名
化応：83名	医学：93名	夜間：55名

テスト問題のレベルは、高校卒業程度のものを選び、問題は東京書籍の許可を得て、石川ほか(2007)を利用した。日本語力テスト問題の構成は6種類のジャンルを設定し、問題数は全体で26問である。各ジャンルの内容を以下に示す。

表2 出題のジャンル

問1 異字同訓 (漢字)	6問
問2 第三者に対する敬意表現 (敬語)	1問
問3 基本動詞に対応する尊敬語 (敬語)	3問
問4 慣用表現1 (文章表現)	3問
問5 文脈に即した適切なことば (文章表現)	3問
問6 慣用表現2 (文章表現)+意味	10問
計	26問

3. 日本語力テスト結果と分析ー

まず、日本語力テスト解答者全体の「成績度数分布」(図1)、「学科別にみた平均正解率とSD」(図2)にそれぞれ示すことにする。

全体の成績

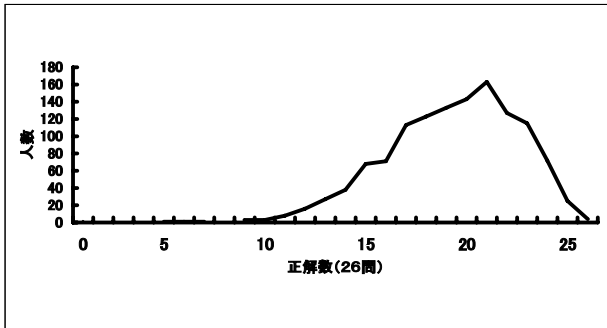


図1 度数分布

高校卒業程度レベルとは70%以上の正答率をさしている(石川ほか2007)。図1の結果から、全体的なレベルとしては高校卒業程度の日本語力があるとみられる。各学科で受検者数にばらつきがあり、単純な比較はできないが、学科別にみた平均正解率とSDには大きな開きがある(図2)。

なお、今回利用した問題の抜粋はP83, P84に転載しているので、参照されたい。

以下、テスト結果についてみていくことにする。

学科別

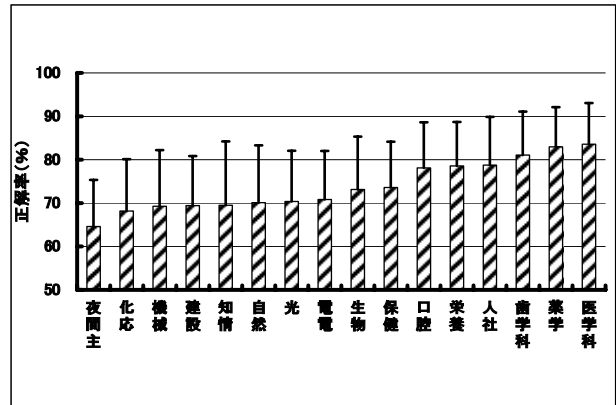


図2 平均正解率とSD

3-1. 文理比較

まず、文系・理系の観点から正答率について比較してみることにしたい。

文系 (人社のみ)

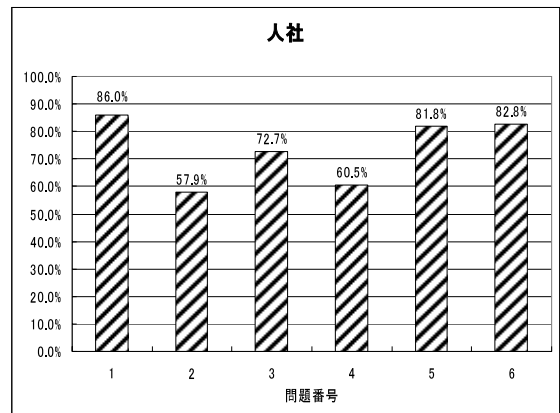


図3 正答率

理系 (人間社会学科以外)

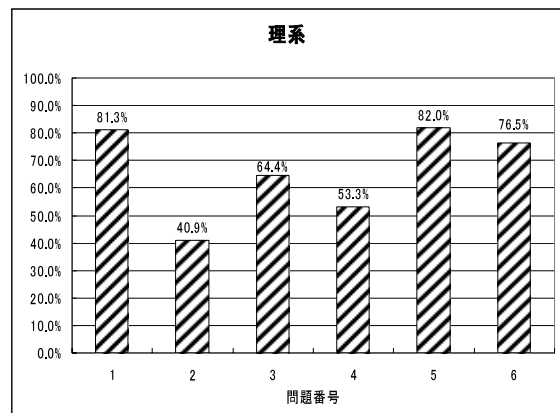


図4 正答率

図3, 4は、問1～6の正答率をグラフで表したものである。グラフの形としては、文理で大きな違いは見られないが、問5以外は文系の正答率が上回った。各問題の文理の差は、問1が4.7%、問2が17%、問3が8.3%、問4が7.2%、問5が0.2%、問6が6.3%となった。最も大きな差は問2であり、この設問は第三者が会話に登場してくる場合の敬意表現である。会話している相手、会話中に出てくる第三者の双方向への敬意を考慮しなければならないため、正答率が低い。無論、人間社会学科の正答率よりも低い学科が多かったということも要因の一つではある。

概ね文系が優位を示しているが、問5のみ理系がやや優勢となっている。他の問題においては人間社会学科が上位を保っているものの、ここに限っては学科別でみても順位も中盤あたりにいる。人間社会学科も81.8%と決して低い正答率ではないのだが、医歯薬の3つの学科が90%前後の正答率を誇っているため、理系の平均を引き上げている。

3-2. 問1 異字同訓の使い分け

異字同訓の漢字についての問題である。他の設問に比べると全体で82.0%と、正答率は高い。栄養学科にいたっては正答率89.2%でかなり高い。

個別でみると、全体的に正答率が低いのが一問目のアで、「金遣いのあらい男」という問題なのだが、〈大雑把〉などの意味を持つ「粗い」との答えが全体の4分の1を占めた。誤答をした者には、この問題を金遣いの「勢い」ではなく「使い方」としてとらえていたのではないかと考えられる。

一問目のイはどの学科も正答率が80%を超えている。ウも同様に90%を超えている学科が殆どで、栄養学科は100%の正答率を誇っている。イとウのどちらも比較的目的にする機会が多いのだろうか。

二問目は「慎」と「謹」の字の使い分けである。どちらも本来の意味としてはそう違いはないのだが、「謹」は形式的に「謹んで」の形で用いられることが多い。そういう意味で、「慎」の字の方がよく使用されるのではないだろうか。

二問目のアの全体の正答率は76.3%となったが、

生物工学科は60.3%と他よりも低い正答率を示した。用法の違いの認識が甘いのかもしれない。イの正答率には、歯学科の92.9%、栄養学科の90.2%と、非常に高いものがみられた。先にも述べたが、「つつしんで、お祝いの言葉を申し上げます。」と形式的な文であるので、比較的答えやすかったのではと考えられる。

ウは医学科が92.5%、工学部夜間主が65.5%と正答率の最高値と最低値の差が開いた結果になった。問題が「言葉をつつしみなさいと注意された。」と、言葉に関する文だったために判別しにくかったのかもしれないが、全体では81.6%と高いのでこれは単に夜間主の学生が異字同訓の判別が苦手だった可能性が高い。

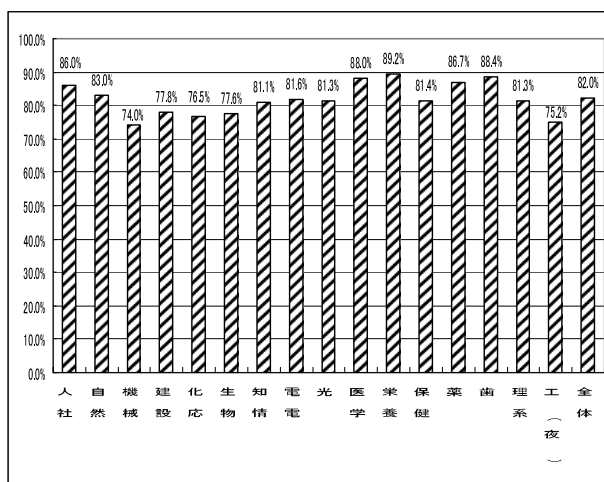


図5 問1の正答率

3-3. 問2 敬意表現

第三者が会話に登場してくる場合の敬意表現であり、相対的な立場を考慮しなければならないということで、問1～5までの中では難易度の高い設問ととられたのであろうか。唯一の文系である人間社会学科であっても、正答率は高くはない。50%台後半以上を示したのが、人間社会学科を除けば医学科、保健学科、薬学部、歯学科と、医歯薬系が集中しているのが興味深い点である。

誤答で最も多かったのが②の「かたがお宅へおいでになりました。お留守でしたので、この果物かごを預かりました」であるが、これは「おいでになられる」で二重敬語が使用されている、「預かりました」を「お預かりしました」と謙譲語に

していない点などから不適切と見なされるのだが、他の選択肢に比べると、自然な表現と感じた回答者が多かったのであろう。

本テストの受検者は学部1年生であり、年齢は20歳前の者が多い。高校を卒業して間もない学生も少なくなく、今までの生活においてまともに敬語を使用する場面がそこまで多くなかったと推測できる。そのため、尊敬語の使い方もいまひとつ理解できておらず、二重敬語にも不自然さを感じないのであろう。

問題ごとにみた場合、学科間における正答率の差が最も大きいものが問2の歯学科と建設学科の差であり、27.8%もの差が生じている。全体的なばらつきが最も激しいのもこの問題であった。

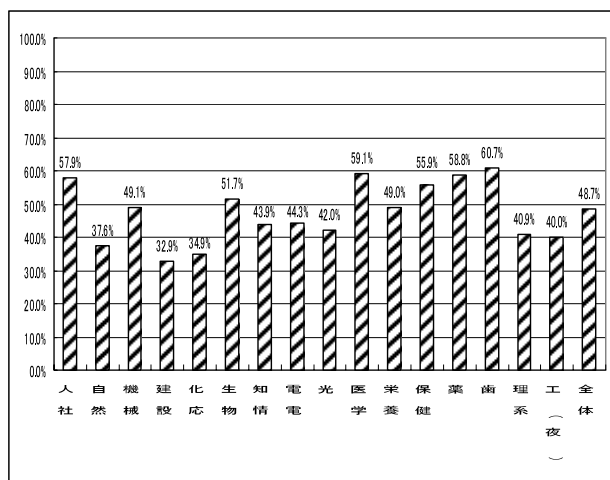


図6 問2の正答率

であることは広く認識されているものの、二重敬語になってしまっている。

同じことが三問目にも言える。「食べる」の尊敬語「召し上がる」を答える問題だが、③の「召し上がられ」が誤答のほとんどを占めた。やはりこれも二重敬語になり、不適切である。

問2の項でも述べたが、学生生活において敬語を使用しなければならないといった機会はそう多くはない。日常的に使用されないのであれば、敬語の理解やその使い方は定着しにくい。こういったこともあって、敬意を高めようとする意識が働いてしまうのか、一般的に正しいとされる敬語の使い方から外れ、二重敬語を選んでしまうのではないか。

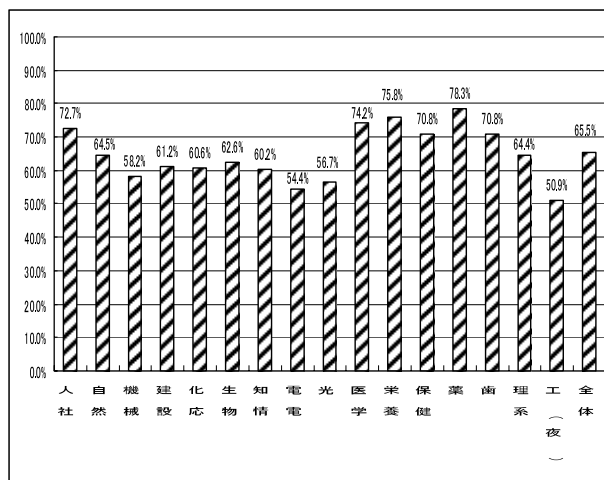


図7 問3の正答率

3-4. 問3 基本的な動詞に対応する尊敬語

敬語についての設問である。工学部夜間主の正答率が50.9%と最も低い。全体の正答率についても65.5%と、決して高いとは言えないものとなった。

小問ごとにみてみよう。一問目の全体の正答率は74.8%と、低くはない。最も多かった誤答は①の「いたし」で、10%以上の学生が選択している。尊敬語の用法を問う問題であるにもかかわらず謙讓語を選択したのは、おそらく「いたします」という言葉に慣れているからであろうと推測される。

二問目になると全体の正答率もやや落ちる。「言う」の尊敬語である「おっしゃる」を答えさせる問題であるが、誤答のほとんどが①の「おっしゃられ」であった。「言う」の尊敬語が「おっしゃる」

3-5. 問4 慣用表現

慣用的表現に関する設問であり、これも問2と同じく正答率は比較的低い。日常生活において、あまりこのような表現を使い慣れていないということであろうか。特に注目したいのが一問目で、全体での正答率は23.0%と極端に低い。医学科にいたっては9.7%と10%を切ってしまった。加えて②と回答した学生は50%を越え、「敷居が高い」という言葉が「(品が高くて) 気が進まない」という風にとらえられているようだ。逆に二問目の「われにもすすがる思い」に関しては85.2%と正答率が高い。人間社会学科、医学科、栄養学科、薬学部が90%を超えるほどであった。やはりその表現に対する使用頻度や、聞き慣れているかが重要な点になっているように思われる。

三問目の「気が置けない」は、〈気を遣ったり遠慮したりする必要がなく、打ち解けられる関係である〉という意味であるが、実際に誤用が指摘されるようになってからほぼ半世紀も経っており、一般的にも逆の意味でとられやすい。そのためか、全体での正答率も約半分となってしまうようである。

慣用表現に関しては、二問目の正答率の高さから日常的に使わないということもないのであろうが、一問目と三問目の誤答の偏りから勘違いしたまま使用しているのではないかとということが考えられる。勘違いしたまま使用されているということは、その言葉が会話中に誤用されても周囲から指摘をされない、もしくは周囲も誤用を誤用と思っていない可能性が高いということまで推測される。

表現方法やその意味は時代や地域によって変化していくものであるため、今回誤用とされたものがいつか正しい意味として主流になる日がくるかもしれない。この観点から言えば、表現の変化の過渡期といったところであろうか。

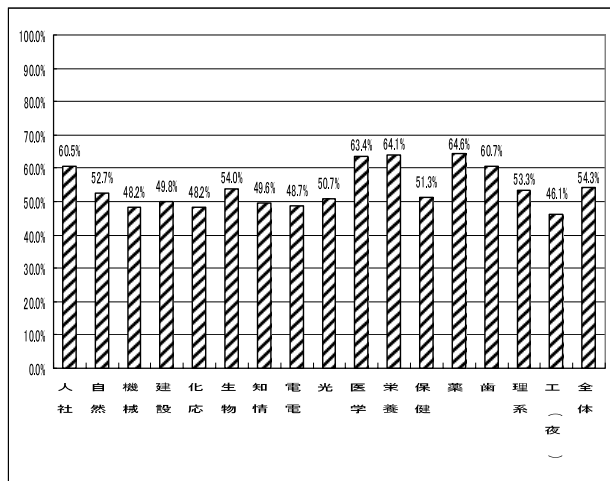


図8 問4の正答率

3-6. 問5 文脈に即した適切な言葉

文脈に即した適切な言葉を選択する問題である。設問の選択肢には、字面が似ているもの、似たような意味のものが並び、ことば一つひとつの意味を正確に捉えている必要がある。全体の正答率は82.0%と比較的高めであり、医学科においては90%を超える。しかし、その中でも低いのが工学部夜間主であり、こちらの正答率は70.9%と他学

科との差がやや大きい。後に述べるが、これは一問目の正答率が大いに影響しているようである。

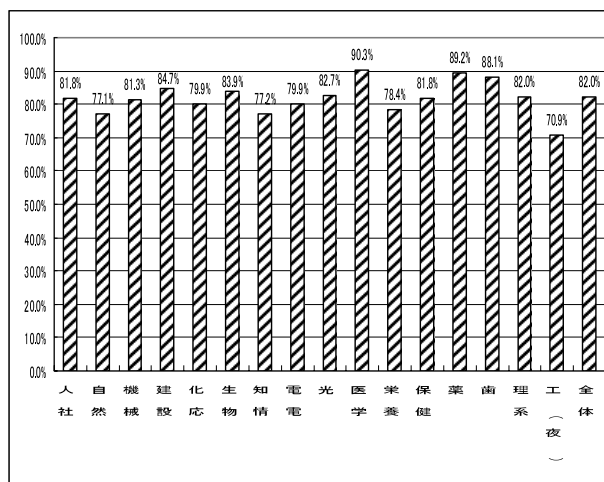


図9 問5の正答率

小問ごとに全体の正答率をみると、一問目が72.8%、二問目が82.8%、三問目が90.3%となった。この三問の内、一問目のみが漢語の使い分けを問うものとなっており、回答者にとって本項目で出された熟語の意味の判別自体に慣れていなかったかということが考えられる。

一問目は「代置」、「代行」、「代替」の選択である。一文字目が同じなので語の意味を混同してしまうことはあったかもしれない。問題文は、「機能の代わりに果たす」という意味の言葉を選択させるものであったので、③の「代替」が正解なのだが、誤答には②の「代行」が多かった。これは各単語の意味の判別の不十分さと、どの言葉をよく耳にするかという差ではないかと考えられる。この問題では工学部夜間主の正答率が43.6%と極端に低かった。言葉の意味を十分に理解できていないのではないかと。

二問目は〈急所を押さえる〉という意味で、「のどくびを押さえる」を選択させるものだったが、誤答には「みぞおち」を選んだものが比較的多かった。どちらも急所という点では違いないのだが、「～を押さえる」の形で使われるのは「のどくび」の方である。

三問目は楽に何々するという意味で「優に」を選択させる問題である。全体の正答率が90.3%と誤答自体少ないのだが、その中でも「余裕で」が

席卷している。「余裕で」も近年使われることが多いが、広く認められた用法とまでは言えない。ここでは工学部夜間主が唯一 100%の正答率を示した。やはり先の二問の正答率が大きく影響しているようである。

3-7. 問6 慣用表現

特定の動詞と結びついて用いられる言葉を取り上げた項目である。それぞれに続く動詞とその全体の意味を問う形になっている。このような言葉自体、普段の生活で使用する、または耳にする機会が少ないのであろうか。問題によって正答率にばらつきが見られる。ここでは正答率よりもどのような誤答が多くあったかという傾向をみたい。

まず、それぞれに続く動詞についてであるが、問題ごとの正答率はまちまちになった。一問ずつみてみよう。

一問目の「物議を醸す」では、「醸す」の部分で「交わす」、次いで「振るう」との回答が多かった。「交わす」に関しては、「醸す」との韻の類似性から間違える可能性も高いと思われるが、「振るう」についてはいささか疑問が残る。「熱弁を振るう」などとの勘違いであらうか。

二問目の「論戦を交わす」は、「交わす」の部分で「張る」、そして「振るう」とする誤答が目立った。「振るう」については、他の問題でも誤答としての回答がみられた。回答者にとっては耳慣れた言葉であるのかもしれない。「張る」の誤答が多かったことに関しては、「論陣を張る」という表現との混同ではないか。興味深い点である。

三問目の「弁明に努める」においては誤答が「振るう」に集中していた。助詞「～に」に「振るう」が続くのは不自然と感じるのはおそらく間違いではないと思われるが、それでも誤答の中で最多数を有するのはそのことばを知っているか否かであらうか。

四問目の「言質を取る」では正答率自体が一気に下がり、また誤答数が三桁にのぼるものが三つもあった。最多は「張る」、次いで「振るう」そして「困む」である。「言質」という言葉自体、普段あまり聞かない、使わないのではないかと思う。

「言質」を読めなかったために意味をとることが

できなかった可能性も大いに考えられ、故に続く動詞が不自然なものになってしまったのではないかと思われる。

五問目の「不問に付す」も先の問題同様、正答率が低い。誤答例としては「預ける」、そして「畳む」が上位にあがった。問題にしないという点において選択されたのであろうが、「預ける」が最多であったのは腑に落ちない。何か連想させるものがあつたのだろうか。

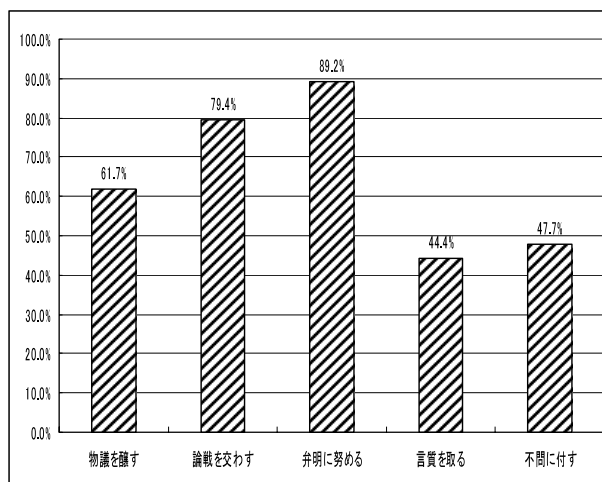


図10 問6 (動詞) の正答率 (全学科)

意味を問う方に関して言えば、全体的に正答率は高く、また問題ごとに特に大きな差は見られない。これは、初めに挙げてある単語である程度言葉の意味は予測可能であることが大きいと思われる。加えて、動詞の場合と違って、正解にならない選択肢が無かったことも関わっていると考えられる。そういう点では、答えやすい項目になったのではないだろうか。

一問目で多かった誤答は「異なる考えを持つ者がそれぞれの立場から論じ合うこと」であり、さらに二問目では「世間の議論や批判を引き起こすこと」が最多であった。これらは互いの正解が誤答のトップにそれぞれ挙がっているという点が面白い。「物議」も「論戦」も、論議という言葉があるので、意味として似たものを連想していてもおかしくはない。

三問目は「証拠になる言葉を得ておくこと」が最多の誤答となった。これは「弁明」よりも、問題文中の「誤解を解くため」に注目しての違い

ではないかと思われる。これについては誤答自体が少ないので一概には言えないのであるが。

四問目の誤答は各選択肢に散っている。唯一少なかった回答は「異なる考えを持つ者がそれぞれの立場から論じ合うこと」であるが、「言質」という言葉からは連想しにくい意味ととらえられたのだろうか。誤答の中でも特定の選択肢に集中しないのは、動詞のところでも述べたが、やはりこの単語が耳慣れないものであるからなのだろうか。

五問目は最も正答率が高く、誤答自体も合計で60しかなかった。これは「不問」から「取り立てて問題にしないこと」という意味を連想しやすいということも起因しているだろう。

問6をまとめて正答率を集計すると、77.3%になる。これは意味を答える方の得点の高さにより全体を大きく引き上げていると考えられる。ここでの正答率の低いところは、一つは今回の受検者がこれまでに会話をしてきた対象による可能性がある。受検者の年齢層が比較的低いことから、会話する相手の大半は同年代の友人や家族といった近い関係の人間であることが多い。つまり会話の中で発言に注意を払ったり、表現方法に気を遣ったりする必要性が低い者との会話が多いため、ここに出てくるような表現を使用する機会も自然と少なくなるのではないだろうか。

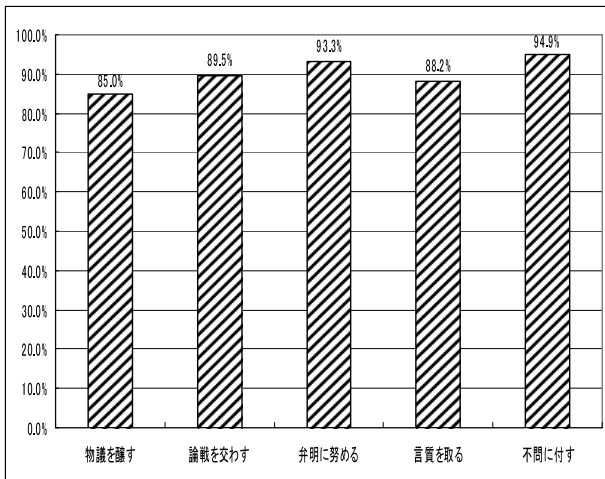


図11 問6(意味)の正答率(全学科)

3-8. 学科別の正答率

全項目の正答率からみたランキングでグラフを作成した。唯一の文系である人間社会学科を抜き、

医学科、薬学科、歯学科が並んだ。多少の傾向はあったとしても、文系だからと言って日本語力が必ず高い、また理系だからと言って低いのが当然という訳でもない。文系の学科が複数あれば、もう少し詳しくみることができたかもしれない。

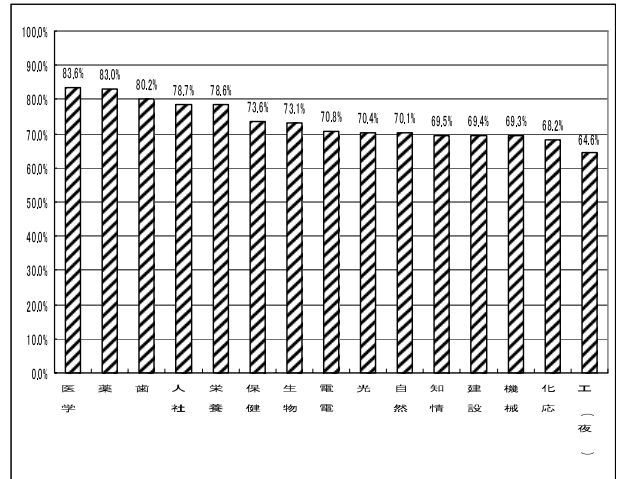


図12 学科別の正答率(全問)

理系に注目すれば、医歯薬系の学科が上位を占め、それに工学部と自然システム学科が続く形となった。工学部と自然システム学科にしても、その正答率に大きな差はない。

3-9. 問2以外の正答率

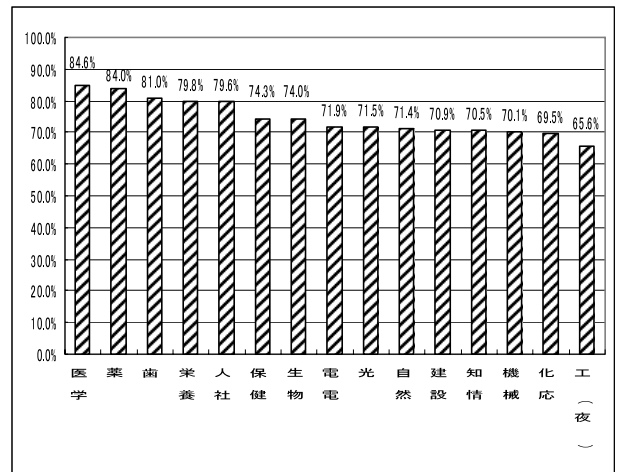


図13 学科別の正答率(問2以外)

問2が極端に低い正答率を示していたので、それのみを外した場合の正答率でグラフを作成した。順位に大きな変動はみられないが、一部で順位の交代がみられた。まず栄養学科と人間社会学科、

そして建設学科と知能情報学科である。どの学科も正答率は上昇しているので、問2の正答率次第で順位の入替えがなされたということだろう。問2の正答率の差に関して言えば、前者は8.9%、後者は11%の差がある。

4. まとめ

全体的にみたとき、最も正答率が高かった学科と低かった学科の差が大きいたことが分かる。その差は19%もあり、同学年であっても言葉に関する認識や理解に差があるということである。また、問題作成に利用した東京書籍『日本語検定3級』(2007)によると、当テスト(高校生卒業レベル程度)の合格ラインは目安として70%以上を設定しているが、70%未満の学科が5学科に及んだことも問題であろう。

問1は異字同訓の漢字についての問題であった。日本語の元々の同音異義語の多さもさることながら、自分の手で文字を書くという習慣が失われつつあることも、漢字の判別能力の低下に繋がっているように思われる。

問2は会話中の第三者が登場する場合の敬意表現である。今回の受検者は、敬意表現に関するものは苦手とする傾向がみられる。これは最も正答率が低いものになった。30%少々の正答率の学科もあったほどである。

問3は基本的な動詞に対応する尊敬語を問う問題であった。日常会話において敬意表現を使用する機会が少ないのだろうか、普段使用するには十分とは言えないような結果になった学科もあった。

問4は慣用表現に関する問題である。正解不正解にかかわらず回答が偏ったことから、慣用表現の使用が廃れたのではなく、誤用でもそれが受け入れられている状況にあるということが考えられる。言葉の変容の途上である可能性も考えられる。

問5は文脈に即した適切な言葉を選択する問題であった。正答率は比較的高い設問となったが、同じ漢字を含む熟語の意味の使い分けが多少難しかったらしい。単語それぞれの意味を把握しているかどうかうかがえる。

問6も問4と同様、慣用表現に関する問題である。意味を問う項目に関しては正答率が高いが、

結びつく動詞の選択には問題ごとにばらつきがみられた。

このテストは言葉に関する知識、および認識などについて調べるために行われた。そこにみえたのは、低くはない正答率であった。しかし、問題ごと、学科ごとに細かくみた場合には、それぞれの言葉に関する認識の甘さが露見した。言葉というものは、母語であろうとなかろうと日常的に使用しなければ身につかない。つまり、テストの正答率が低いところは、その言葉、表現が定着していないということである。

敬意表現に関して、正答率が低い理由の一つとして考えられるのは受検者の年齢層の低さである。経験上、この世代は敬意を払って会話しなければならない相手と会話する機会が多くないと推測されるので、表現方法が定着しづらいのではないだろうか。

現代はコミュニケーション能力の低下が懸念される世の中である。それはどれだけ日頃から他人と接するかどうかとも起因するところであろうが、また同時に表現方法が貧しくなっているのではないかと考えられる。少なくとも伝統的に使われてきた表現に関しては、今回のテスト結果をみる限りそれが言える。

今後は、継続して日本語力テストを行うことで、大学生の日本語に対する認識などの現状の把握、加えて受検者が日本語の表現を知る契機、また思い出す契機としたい。

参考資料

- 小野 博ほか (2005) 「日本の大学生の基礎学力構造とリメディアル教育」 NIME 研究報告 独立行政法人 メディア教育開発センター
<http://www.nime.ac.jp/journal/05-6.pdf>
 石川昌紀ほか (2007) 『平成19年度版 日本語検定 公式 3級過去・模擬問題集』 東京書籍
 徳島大学 (2008) 「ラーニングライフ 第1回学生の学習に関する実態調査」 報告書

日本語能力検定問題抜粋

問1 各文の——部分の言葉を漢字を使って書くとき、【 】内のどちらの漢字を用いるのが適切でしょうか。番号で答えてください。

一 【①荒 ②粗】

- ア 彼は、昔から金遣いのあらい男だった。
- イ ずいぶん人使いのあらい上司だ。
- ウ 細部の詰めができておらず、スケジュールの組み方があらい。

二 【①慎 ②謹】

- ア 体のこともお考えになり、酒を少しつつしまれてはいかがですか。
- イ つつしんで、お祝いの言葉を申し上げます。
- ウ 言葉をつつしみなさいと注意された。

問2 【 】のようなとき、このように言えばよいでしょうか。最も適切なものを選んで、番号で答えてください。

【留守中の隣家を訪ねてきた親戚と名乗る人から、果物かごを預かってくれと頼まれていて】

ご親戚の村岡さんとおっしゃる（ ）。

- ①かたがお宅を訪ねていらっやいました。留守なので、この果物かごを渡してくれと言っていました
- ②かたがお宅へおいでになられました。お留守でしたので、この果物かごを預かりました
- ③かたがお宅へ参られました。留守でしたので、この果物かごをことづけてお帰りになりました
- ④かたがお宅へいらっやいました。お留守でしたので、この果物かごをことづかりました

問3 一～四の文の——部分を敬語を使って言おうとするとき、どのような言い方が適切でしょうか。適切なもの一つを選んで、番号で答えてください。

一 Tシャツのサイズは、Sにしますか。

[①いたし ②いたされ ③なさい ④なさられ]

二 先生、ホームルームのとき先生が言った大学の説明会のこと、ご相談したいのですが。

[①おっしゃられ ②おっしゃっ ③申され ④お話しし]

三 もう少し料理を食べてはいかがですか。

[①いただかれて ②いただい ③召し上がられ ④召し上がっ]

問4 それぞれの見出しに掲げた言い方を本来の意味で使っているのはどの文でしょうか。一つを選んで、番号で答えてください。

一 【敷居が高い】

- ①借金をしたままの伯父のところへ挨拶に行くのは敷居が高い。
- ②オペラを楽しんでみたいという気持ちはあるが、劇場へ行くのは敷居が高い。
- ③県下でベストエイトを目指すとなると、これは少々敷居が高い。

二 【わらにもすがる思い】

- ①報告書の提出期限に間に合いそうもないので、わらにもすがる思いで課長に手助けをお願いに参りました。
- ②夫の行方が知れず困り果てたわたしは、わらにもすがる思いで、占い師のもとを訪ねた。
- ③この間、お互いわらにもすがる思いで協力し合ってきたわけだし、これからはよろしく頼むよ。

三 【気が置けない】

- ①大山部長は大学の先輩だし、気が置けない関係じゃないのだから、相談してみたらどうかな。
- ②あいつは腹の中で何を考えているのか分からない男で、全く気が置けない。
- ③岸田君とは小学校以来の付き合いで、今でも気が置けない間柄なんです。

問5 一～三の文の()に入る言葉として適切なものを一つ選んで、番号で答えてください。

一 パソコンの機能は、携帯電話でもおおむね()可能になった。

[①代置 ②代行 ③代替]

二 派内の最大グループの票が確実になれば、相手陣営の()を押さえたも同然だ。

[①手首 ②のどくび ③みぞおち]

三 ベンチャー企業を起こしたこの女性によれば、月に三百万円は()稼ぐという。

[①余裕で ②存分に ③優に]

問6 一～五の太字で表した言葉は、特定の動詞と結び付いて用いられることが多いものです。結び付く動詞を選んで、①～⑩の番号で答えてください。一つの動詞は、一回しか使えないこととします。また、特定の動詞と結び付いた——部分の言い方が表す意味を、⑪～⑮の番号で答えてください。

一 何かと**物議**を_____

二 与党と**論戦**を_____

三 誤解を解くため**弁明**に_____

四 交渉の中で**言質**を_____

五 過去は**不問**に_____

- ①努める ②畳む ③交わす ④振るう
⑤困む ⑥取る ⑦醸す ⑧預ける
⑨張る ⑩付す

- ⑪やむをえない理由などがあつたことを説明すること
⑫異なる考えを持つ者がそれぞれの立場から論じ合うこと
⑬世間の議論や批判を引き起こすこと
⑭取り立てて問題にしないこと
⑮証拠になる言葉を得ておくこと